

北原淳・西澤信善編著

『アジア経済論』

ミネルヴァ書房 2004年 viii+322ページ

さとう ゆきひと
佐藤 幸人

本書はタイトルが『アジア経済論』となっているが、また、章によって議論の対象に出入りがあるが、基本的には東南アジアを中心に論じている。同じシリーズに『中国経済論』があるので、中国は意図的に外されているほか、韓国や南アジアについての言及も限られているので、それらの国に興味のある読者は期待を外されることになる。

しかし、それを前提に読むならば、間口はなかなか広い。農業・農村を中心とした通史（第1章）、工業化政策（第2章）、所得格差（第3章）、アジア経済危機（通貨危機、金融危機を含む）関連（第4章および第5章）、環境問題（第6章）、移行経済（第7章）、FTA（自由貿易協定）および地域協力関連（第8章～第10章）、日本との関係（第11章）と幅広いトピックを包含している。同時にアジア経済危機に関連する章を2つ、FTAや地域協力に関連する章を3つ収め、この2つの問題に対する書き手側、読み手側の強い関心を示している。また、後述するように第8章と第9章では、アジア諸国が近年、FTAに対して積極的になった要因として、経済危機が重要だったと指摘している。2つの議論は強く関連しているのである。このほか第2章でも、アジア経済危機を契機とした工業化政策の転換を議論している。

本書は大学の教科書、参考書として使われることを想定して書かれている。広範なトピックを含んでいるので、学生がそれらに通じ触れるには便利である。また、最近、アジア経済に関して何が注目を集めている問題かもわかりやすい。ただし、直近の動きまで視野に入れている分、必ずしも共通の認識が定まったとはいえない議論も本書では述べられている。読書には常に必要なことだが、本書を読むときにも批判精神を忘れずに持ってもらいたい。

すべての章について詳しく紹介する紙幅はないので、ここでは2つの章のみ取り上げたい。ひとつは第4章である。本章のタイトルは「アジア経済危機から学ぶ」となっていて、「アジア経済危機——発端——」、「マクロ安定化——誤った処方箋——」、「ミクロ構造改革——誤った診断——」、「アジア経済危機の原因——国際資本市場の不完全性——」、「国際資本市場の『脆弱性』にどう取り組むか」、「成長回復のシナリオ1——自律的成長への道——」、「成長回復のシナリオ2——政策および国際経済要因の役割——」、「『市場原理主義』との訣別」という8つの節からなる。第2と第3の節ではIMFを厳しく批判している。一方、第4節では危機の真因として、1990年代の国際資本市場が急速に膨張したこと、にもかかわらずそれは非常に不完全なものであったことを指摘する。そして最後の節で、市場メカニズムを無批判に信奉するような「市場原理主義」の弊害を深く認識する必要性を訴えている。

本章の著者、高阪章は危機発生時から論陣の第一線に立ってきた。本章には著者がこれまで重ねてきた議論を若い読者にも伝えたいという熱意を感じる。評者としても本章を通して、誤った理解がいかにも多くの人を苦しめることになるのかを読者が学ぶことを期待したい。

第4章から続けて読むことを勧めたいのが第8章「地域統合の意義と課題——東アジアの地域統合を中心に——」である。穏やかな語り口から始まるが、第2節「東アジアにおける地域統合とその背景」以降、論調は急速に熱を帯びてくる。第4章で述べられた、IMFのアジア経済危機に対する誤った対応が、アジア諸国の地域統合に対する関心をいかに高めたかを指摘し、その間の歴史の連続性を明らかにしている。

本章の著者、平川均は元々、高阪とは異なるアプローチからアジア経済の研究を行ってきた。本書の随所から、経済危機がアジア諸国にながしかの一体感を与えたことを読み取れるが、アジア経済の研究者の間にも従来にはなかったような共通の認識を生んだのかもしれない。

（アジア経済研究所新領域研究センター）